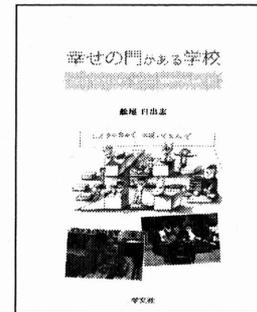


## 書評

船尾日出志『幸せの門がある学校 子どもたちとともに育ち、育てられた  
養護学校長の体験と学び』

(学文社 2012年11月刊)

ISBN978 - 4 - 7620 - 2302 - 6 C3037



本書は、船尾日出志教授が愛知教育大学附属養護学校（正式名称：愛知教育大学附属特別支援学校）の校長として、2008年3月にその委嘱を受けてから2011年3月の退任までの間に体験したことを、任期1年目である2008年の出来事を中心にまとめたものである。

本書の内容は、著者が日々学校長として経験する出来事と、専門であるドイツ教育学の知見が交互に叙述される。具体的には、子どもを迎える準備・始業式・食事指導・休み時間での様子・夏休み中の仕事、運動会、研究協議会、修学旅行、卒業生を送る学芸会、卒業式の様子が記録や手紙などによって生き生きとつづられていく。その間に、治療教育学・労働・知的障害・プロジェクト定位授業・アイデンティティ・美的教育・人間学等といった著者の専門であるドイツ教育学の知見が盛り込まれていく。

この著作がすぐれている点は、まず、著者が大学とは違った職場環境のもとで誠実に子どもや先生たちと向き合い、自身が成長していく過程を見事に描ききっていることにある。本書の構成をみればわかるが、学校長となり戸惑いの中で、まずは専門であるドイツ教育学から理論を学ぼうとする姿勢が見られる。その後、時間がたつにつれてしだいに現場での様子や自身の考えが中心に描かれていく。ここに著者の理論と実践の総合化をみることができる。もはや理論は筆者の血肉となり、教育現場こそ、そこにおける実践こそがすべてであり、そこに輝くものがあるのだという気持ちが伝わってくる。理論と実践がひとつになっていくさまこそ学ぶべきであろう。

次に、著者は「教育とは人を育てること、知的障害者の教育も同じです。原理的には、特別支援教育は障害者のみに有効なのではありません。いかなる教育も特別支援教育なのだ」と本書末で喝破している。

この考えは、日々の教育活動に対して無自覚になりがちな教員の態度に対して反省を激しく促す。ともすれば、教員は子どもたちを全体としてとらえ、一人一人の姿を見失いがちになる。一人一人の子どもたちに対応することへの疲労感、怠慢などからそうになってしまうのである。したがって、教員生活が長くなってしまった人、養護学校（特別支援学校）での勤務経験がない人、特別支援教育に興味がない人こそが、あえて読むべき書であると思われる。

そして、何よりも、本書に終始一貫通底している、すべての子どもたちに対する筆者のあたたかいまなざしや態度こそ学ぶべきものである。

(愛知教育大学 社会科教育講座准教授 近藤裕幸)